

「おはしより」形成の過程

The Process of “Ohasyori” Formation

福田 博美

Hiromi Fukuda

要旨

近世初期、男女共に対丈であった小袖は、男物が対丈のままであったのに対し、女物の丈は長くなった。そのために女物では着丈より長い分を腰のあたりで引き揚げ、腰紐で締めて丁度良い丈に調整する「おはしより」が形成された。その過程に関して日本服装史では言及されていない。そのため、本稿で画像・文献資料より辿ることを目的とした。また、和服裁縫書から用語の初出にも着目した。その結果、江戸時代、室内で裾が引摺られた小袖は、外出の際、たくし上げたり、袂を取って着装された。しかし、片手が塞がる不便さから、「抱帯」「しごき帯」と称された細紐で前身頃をはしよった。明治時代、着付けの段階で「腰帯」と「下締」が締められ、「おはしより」と称される着装法が完成した。その姿は「腹の辺にカンガルーといふ獣の如く、無益の袋を作るは真に抱腹なり」と揶揄され、大きな袋状の「おはしより姿」は不評であったが、昭和時代に入り、体形に合わせた着付けが進み、「おはしより」はその利便性に加えて着装美が求められた中で定着化した。また、和服裁縫書では1957年に「お端折」の用語が明らかとなったが、1900年刊「流行」の「ハシヨル」の言葉が初出と捉える。

●キーワード：きもの (kimono) / おはしより (ohashori) / 着付け (dressing)

I. はじめに

「おはしより（御端折）」とは、女物の着物において着丈より長い分を腰のあたりで引き揚げ、腰紐で締めて丁度良い着丈に調整すること、また、その部分をさす。「お」は接頭語で、「はしより」は「はしおり（端折）」の変化した語をさす。現在、「はしおり」は着物の裾を持ち上げて帯にはさむ姿を表す。言葉は類似するが「おはしより」と「はしより」の着装法は異なる。語彙の初出を『精選版日本国語大辞典』の用例で確かめると「はしより」が1753（宝暦3）年『男伊達初買曾我』¹⁾、「おはしより」は1975（昭和50）年『がらくた博物館』²⁾とある。筆者のこれまでの画証研究から「はしより」は江戸中期³⁾、「おはしより」は明治中期⁴⁾にその着装が仮定されるが、日本服装史の研究領域でその過程は言及されていない⁵⁾。そこで、画像と文献資料から「おはしより」形成の過程を明らかにしたい。

「おはしより」は室内で裾を引摺り生活した人々が外出の際、歩きやすいようにたくしあげた着装法である。この姿は、平安時代の「壺装束」と称される女性の旅姿に同様の特色が見られる（図1）。「壺装束」の名称は装

束をたくしつぼめた姿に由来し、紐で腰の位置に束ね、裾を持ち上げて「壺折」とした。装束における「壺折」と着物の「おはしより」は、時代や服装形態は異なっても室内外での着装の変化に紐を活用した共通性が見られた。

先行研究には、足さばきを良くするために前身頃をはしよるために用いた「抱帯」に着目した遠藤武著「近世女装における抱帯の研究」⁶⁾や今村由美子著「20世紀前半における女性の着物の変化—社会進出や生活様式の変化が着装に及ぼした影響について—」⁷⁾がある。今村は、1905（明治38）年7月の創刊から1944（昭和19）年4月の『婦人画報』430冊の記事と写真から、社会状況に連動して変化した女性の生活や意識、着物、着装法の変化を述べている。そこでは「おはしより姿」の一般化と重ね着の減少の連動性を捉え、女性の社会進出による活動性とファッション性の重視が説かれた。また、「おはしより」着装の科学的報告には、三野たまき・名子のはるか著「浴衣のおはしよりの着崩れに関する研究—特に礼の動作、体形、腰紐の締め位置に関連して—」⁸⁾がある。

本研究では画像・文献資料により「おはしより」形成の過程を時代順に辿り、和服裁縫書から用語の初出を捉えたい。まず、その前提として、「男物」同様に「女物」が対丈であったならば「おはしより」は発生しなかったわけである。男女共に対丈であった近世初期の小袖が対丈の「男物」と丈を長く仕立てる「女物」に分かれた点にも注目したい。すなわち、小袖染織の華麗化や帯の発達には「女物」の特性である。そこで、研究対象の時代を小袖が広まる室町後期から辞書で語彙が抽出された昭和時代までとし、対象を女性に絞った。

II. 「おはしより姿」の発生

1. 室町時代後期から安土桃山時代

前述の「壺装束」には女性が往来で顔を隠す目的で、市女笠⁹⁾や被衣¹⁰⁾を伴った。室町時代後期の「月次風俗図」では花見をする上層女性たちは被衣姿で、小袖に「壺折」は見られず「引摺」に描かれた。「引摺」とは、「おはしより」をせずに着物の裾を引きずる着装法のことである。

次に、「七十一番職人歌合」の立君姿では、着丈は少し短く、褌を取った(図2)。「褌取」は裾の長い着物の褌を取って裾をからげることさし、豎褌を手で持ち上げて歩くことをいう。この着装法は『日本書紀』巻第17(継体天皇7年9月)に「端^{ひら}取して」¹¹⁾と記されるところから奈良時代にはこの所作があったことがわかる。

仕事姿を見ると、その素材が麻を主としたためか、活動性からか、着丈は総体的に短かく脛ぐらいであった。前掲「七十一番職人歌合」では屈んだ紺搔の女性は上着を帯に挟んで端折る姿が見られた。



図1 壺装束
「春日権現験記絵」(摸本)
東京国立博物館蔵



図2 市女笠・被衣姿
「七十一番職人歌合」(中巻)
前田育徳会蔵



図3 蹴鞠姿
「遊楽図屏風(相応寺屏風)」徳川美術館蔵 ©徳川美術館イメージアーカイブ/DNPpartcom



図4 抱帯(左)としごき帯(右)
左: 鈴木春信画「風俗四季哥仙 竹間鶯」慶應義塾蔵
右: 鳥居清長画「風俗東之錦 武家の若殿と乳母、侍女二人」山種美術館蔵

桃山時代、着丈は長くなったが、男女とも対丈で差はなかった。

2. 江戸時代前期

江戸初期、「花下遊楽図」に描かれた女性たちの対丈の長さは身分の差無く、戸外でも「引摺」である。遊女は帯の上に上着をたくし上げた姿で描かれた(図3)。身幅が広くゆったりとした小袖を細紐で調整している様子が他の屏風絵にも確認でき、「相応寺屏風」では散策に動き易さを求めた姿態が描かれた。これは、反物寸法の改定による変化が要因とみられる。すなわち、1626(寛永3)年の「反物制」で「縮紬一反工尺にて長三丈二尺。幅一尺四寸。布木綿一反長三丈四尺。幅一尺三寸たるべし。」¹²⁾と定まった寸法は、1664(寛文4)年の「織物寸尺制」で「絹。紬一端匠尺にて長三丈四尺。幅一尺四寸。布。木綿は長三丈四尺。はゞ一尺三寸たるべき。」¹³⁾となり、絹・紬の丈は3丈2尺から3丈4尺へと2尺(約60cm)分長くなった。それが着丈にプラスされたため、歩行の際に足さばきが悪くなり、そのためにたくし上げたり、褌を取るようになったのである。

元禄期(1688-1704)、菱川師宣(1618-1694)は褌を取る外出姿を多く描いた。また、「和国百女」では身頃を抱えたところから名前が付いた「抱帯」を締めて帯との間にたっぷり着物を挟んだ姿や二巻した帯を割いて間から着物を引出した女性を描写した。当時、反った褌衿先を少し引き上げて帯に挟み格好を整えた。

3. 江戸時代中期

浮世絵聚花編集部編『浮世絵聚花』¹⁴⁾から関連の浮

世絵 408 点を抽出した結果、江戸中期の役者絵に前身頃をたくし上げた姿が多く描かれた状況がわかった。

鈴木春信 (1725 ? -1770) は師宣同様に前帯を広げてそこにたくし上げた上着を挟んだ姿を描いている。これは、帯が細紐から次第に帯幅が広がり安定したためである。また、「抱帯」(図4左)に加えて一幅の布を適当な長さに切り、そのままごいて用いた「しごき帯」も登場し、近所への外出や階段の上り下りには褌を大きく取った。鳥居清長 (1752-1815) は旅姿において長旅には「抱帯」、近距離には褌取の着装を描き分けた。武家のお宮参り(七五三)の装いではしごき帯(図4右)および抱帯が描かれ、後者の端には房飾りが付けられた。また、帯の発達に伴い、広幅帯と前垂の紐との間にたくしあげた姿も見られた(図5)。

着物の着装法には、一枚一枚合わせて着る方法と、二枚を一度に合わせて着る方法との二通りがある。後者を一つ前の着法という。この時期、二枚重の描写が多く見られた。一つ前は足さきを良くする方法である。

芸妓は左手で褌を取るところから「左褌」と称されるが、先述の『浮世絵聚花』調査で、手元に着目すると、右手で褌を取った様子が明らかとなった。

4. 江戸時代後期

江戸後期、裾の襷綿を厚くする流行が広まると歌川国貞 (1786-1864) の美人画には褌を取る姿(図6)が多く描かれ、そこでは三枚の着物を一つ前に着装した。

寛政2 (1790) 年に山東京伝が記した『傾城買四十八手』〇見ぬかれた手では、

あの子はモウ何をいひ付てもらちのあかねへひきず



図5 前垂姿

鳥居清長画「風俗東之錦 萩の茶屋」
東京国立博物館蔵



図6 褌取姿

歌川国貞画「星の霜当世風俗(潜戸)」
静嘉堂文庫蔵



図7 相馬黒光

株式会社 中村屋蔵

りづらだ¹⁵⁾

とあり、この頃には「引摺」はその着装方法が転じて、なまめかしく洒落こんで、ろくに働かない女を嘲る言葉となった。

幕末期には、画像資料として写真が登場し、そこには、「おはしより」の上から抱帯を締めた姿が見られる。外出姿では、現代のように紐を結んで固定した「おはしより」の他に、腰帯の結び紐が前に出ている姿も確認できる。

すなわち、この時期は室内でも「おはしより姿」が一般化する一方で、その着装法は固定化されず様々な諸相から「おはしより」が完成する過渡期と推察される。

Ⅲ. 「おはしより姿」の展開

1. 明治時代前期

明治時代、引摺の姿は富裕夫人に限られた一方で、前述同様に洒落込んでばかりいて仕事をろくにしない女の代名詞として「おひきずり」と蔑称された。女性たちに外出の機会が増えて「おはしより」が日常的になったと解される一方で「おひきずり」がだらしのない女性をイメージさせた背景も「おはしより」の確立に起因したものと推測される。

長谷川時雨 (1879-1941) は『随筆・きもの』で「明治風俗」と題して、明治初年の女性の普通の衣服として、「裾はぐつと腰でたくしあげてゐる。」¹⁶⁾と書きとどめている。

このような姿は津田梅子 (1864-1929) が留学帰国後に撮った明治15 (1882) 年頃の写真で確認でき、帯締を帯の下方に締めた点が特徴的である。明治20年代、ジョルジュ・ビゴー (1860-1927) が描いた女性の着物姿にも前述同様の姿態が描写された。

樋口一葉 (1872-1896) は、1887 (明治20) 年2月21日の「萩の舎」発会式に参加した、友人の田辺花圃 (1868-1943) の「きつけが下手くそで、おはしよりは大きな袋がくっついているというあんばいだから、その場にいあわせた田中みの子が支度をし直す。」¹⁷⁾とする。

2. 明治時代後期

1895 (明治28) 年刊行『衣服と流行』(日用百科全書第6篇)「當世女装一斑」では「腰帯」を

衣服をはをれる後、裾の長さを引上げて一巾の縮緬にて腰を占め、然るに衣紋を直し胸襟を整ふ、この時用ゆるを腰帯といふ。¹⁸⁾

と説明し、続いて「下締」については、

腰帯を占めてふくらみたる胸の衣を下に推下げたる後、乳の下に結ぶもの下締なり、品類は大抵同じ、これも外には見えざるなり、近頃花柳の艶姐、経済上、彼の腰帯とこの下締とを略して一筋にて兼用ゆ、すなはち腰を結びたる切の餘を直ちに引上げて帯下締にしたるなり¹⁹⁾

とされ、腰帯と下締を一本で略した芸者の着装がわかる。

前述の「大きな袋」状の「おはしより」は、明治30年代の写真にも確認できる。新宿中村屋を起業した相馬愛蔵氏と共に写る妻黒光(1876-1955)の姿である(図7)。

当時の流行を先駆けて発行した雑誌「流行」において、1900(明治33)年刊行第7号では、「日本婦人服装の特色と欠点」を掲げて、衣服改良の必要性が述べられた。特に注目すべき欠点の第一は

腹の辺にカンガルーといふ獣の如く、無益の袋を作るは真に抱腹なり。²⁰⁾

と挙げた点である。文中で「おはしより」の言回しは無いが、「カンガルーの袋」のたとえは的確で、その姿は図7からも窺える。おそらく、抱腹の言葉通り、当時の読者たちも笑って納得していたのではないだろうか。尚、同年刊「流行」第11号にて日本婦人衣服改良案が懸賞募集され、在来の衣服より実益があり優美で高尚なるものが求められた。²¹⁾

同書の寄書「流行に就ての随感随筆」には

婦女が衣裳を着けるに、一丈餘も有る小幅縮緬で、先づ腰部を括って「ハシヨリ」を下し、其餘りを腹部の邊、帯の下になる所を幾重にも、ぐるぐる巻き其上へ帯を締る事が、一般に行われ居るが、實に下品なもので有る、元來これは藝妓が裾を曳て御座敷へ行き、其出先から芝居見物とか、他所へ連れ込みになる時などに、裾を「ハシヨル」に腰部と腹部に二本の紐がある、夫を御座敷へ出る前に、豫備の紐を一本づつ、持て行く譯にもゆかぬ所から、長い紐で兩用を足す便宜法から來たもので、夫を令夫人、令嬢達が眞似らるゝは歎かはしき事で、幸ひ近頃廢りの方に趨いて來たようだから、各呉服店などでも、夫人向き腰帯、令嬢向き「シゴキ」など、品位高き意匠を凝らして、買出したら能からうと思ふ²²⁾

と記された。先述『衣服と流行』の下締の説明にあった花柳界の流行が一般に普及した諸相がここでは批判された。「ハシヨリ」「ハシヨル」は「おはしより」を表し、言葉の典拠を知る貴重な記述である。また、写真にみる

帯の幅がやや細い点を

藝妓の島田髻が、近頃だん／＼低く薄作になり、随つて帯の結び方も低く小さく成て、ひと頃から見ると大分品格が落て來た²³⁾

とし、当時の流行の諸相から読み取れる。さらに、「おはしより」の下に覗く紐は、同誌12号の流行欄に

近來は匹田鹿の兒の流行に付け、縮緬の染鹿の兒地へ露草、若竹、花桐等の模様を顕はしたる下締(六寸幅に製織しあり)流行にして意氣向にては、一丈二尺物をくけずに二ツに折りて用ゐ、色合は好々なれども、帯の下よりちらほらと見ゆるものなれば、…²⁴⁾

と記された流行の下締と解釈できる。白黒写真では色味や材質が不明であるが、図7で「おはしより」の下から覗かせた下締の着装がお洒落であることが分かる。

3. 大正時代

前代の流行は大正時代にも続いたようで、永井荷風(1879-1959)は「文明」の時世粧で

婦人の前掛は、端折の下にて締むべきを、此の頃にては、多く帯かけて締め、紐を派手に作りて、殊更片結びなどにして…²⁵⁾

と記している。

1921(大正10)、生活改善同盟會から『服装改善の方針』が出版された、そこで婦人服の欠点として、幅の広い帯を狭くする、袴を用いる、または洋服に変える等々が挙がる中、吉岡弥生は「礼服丈は保存したい」と日本服の美に注目して、「長い袖、長い裾、広い帯、何んとなく女らしい優しさと美を備へて居ます。」²⁶⁾と裾の長い着物、すなわち、礼装の引摺の様子が伺える。一方、山脇房子は「洋服に一足跳び主義」と題して「アゲにしたところで、四寸も五寸も腰部で二重に無駄になつて居るのです。」²⁷⁾とアゲの上に点を付けて強調した。すなわち、アゲは「おはしより」分を表したものと思われる。当時の礼装における和服姿は1924(大正13)年、下田歌子著『礼法の巻』で、食事の礼法の中で主客の服装として紹介され、冬服と題して「表着と下着と重ねて着たるかたち」²⁸⁾が描かれ、三枚重ねの女性は引摺であった。

IV. 「おはしより」の普及

1. 昭和時代前期

1928(昭和3)年、ハリウッド美容室のメイ・ウシヤ

マは、美の力を称賛した『近代美しき粧ひ』において「婦人の服装美は腰と裾にある」²⁹⁾と記し「着附の注意」として「肥った方」は長襦袢の着方が基本と唱えて腰紐は後の方を、前より少し下にあて、締めて、端折が後の方がたつぷりする様にします。

腰廻りの太い方はこの端折を多くして、腰廻りの太さを目立たぬ様に注意して頂きたい。³⁰⁾と記し、「背の低い方」は

背を高く見せ様として、帯を高く胸邊で締めたり、端折を高い所に作つたり工夫なさいますが普通…³¹⁾であるが、全体の均整を計る方が効果的と指摘し、日本人の一般的な「足の短い方」は

踵がかくれて了ふ程度に長目に着、帯、腰紐、からげ等を全部幾分上目にします。³²⁾

と説いて細かく帯の結び方を述べている。ここに「端折」が体形調整上のポイントであったことがわかり、また、下締は「からげ」と称されていたようである。

1932(昭和7)年10月1日刊行の『婦人公論』で取り上げられた「流行研究座談会 これからの理想的な日常服」では当時の幅広帯を問題視し

厨川 帯の廣いのは逆も閉口ですわ。

早見 狭い帯を廣くして結ぶ考案がありませんかね。

佐藤(女) 外國人に何處がおかしいかときゝますと、皆帯がおかしい、お腹が大きく見えるぢやない…(中略)

厨川 今のお端折りのたつぷりあるのは情味³³⁾が出て來ますね。それでお端折りをしなければお引摺にして裾に美しい線をずっと出すとか、どつちかにしなければうま味がなくなります。

上野 結局活動着と禮装着と云つたやうな二つの方面から考へなければならぬ問題ぢやないかと思ひます。³⁴⁾

と討論の末、ここでは現在の着物が一番宜しいとされた。すなわち、おはしより分だけ腹部が重なり、外国人はお腹を強調視するが、日本人はそれを趣き深いとみている。「おはしより」を活動的で、「引摺」を礼装的と捉えていることが分かった。

1938(昭和13)年10月1日の『婦人画報』では「新しい日本服」が提案された。一見従来の着物とみまがう「おはしよりのあるツーピース」が紹介されている。

おはしよりは無駄として全く省いて了ふことも考えるが、こゝでは、ツーピースにしておはしよりの感

じを出した。着くづれの點からも。この方がよいはず³⁵⁾

として、その仕立て方の解説が見られる。「おはしより」をスッキリ見せる利点もあってツーピース型としたようである。翌年7月1日の同書では「日本の着物はどう変つてゆく」と題した座談会で、記者が

銀座など歩いてゐる方を見ますと、着物が感覺的にはすいぶん洋服に近くなつて來て居ります。³⁶⁾

と切り出し、粋モダン好みの形・色・模様を評価したが、洋服布地を使った和服、簡単な付け帯を語る出席者はツーピース着物に反対した。当時の若い人の体格が良くなって、標準寸法が小さくなったので大きく仕立てていると語る。また、「仕事は洋服。でないときは和服。」の二重生活との発言もあった。その3年後の記事でも、「一日のうち日中は洋服をよく用ひ入浴後は和服をよく用ひてゐる」と「現代女性の服装調査」が報告された。³⁷⁾

2. 昭和時代後期

1975(昭和50)年、大庭みな子著『がらくた博物館』犬屋敷の女では、着物を着こんだアヤの様子を

時代ものの紅絹裏のついたもので、袖丈が長く、衿をひきつらせて、裾をひろげ、帯を胸高にしめ、袖に両手をさし入れて帯の前で重ねるように胸をかかえて、しゃなりしゃなりと歩いていた。みんなキノノは飛行機の広告と映画でしか見たことがなかったので、「ゲイシャ・ガールだ」と言って眺めていた。³⁸⁾

と記し、当時、すでに着物は非日常的な存在であったことがわかる。また、親しい者が寄って来て、袖や帯のあたりをさわり、

「このタックは、つまり、ポケットのような役割もするので？」とおはしよりのあたりをさわってみたりする。

「袖ならまあ、ポケットの代りにならなくもないけど。このタックはまあ、ここで背の高いひとだ³⁹⁾の、低いひとが、加減をするだけなんです」とアヤは答えた。⁴⁰⁾

と「おはしより」が一般的に用いられ、その目的が身丈の調整であることも理解されていた。

V. 和服裁縫書・裁縫教授書にみる「おはしより」形成

明治時代以降の裁縫書には洋服・こども服が登場するが、主題よりここでは和服のみを対象とする。また、裁縫書は教材として使用される点から再版が多くみられ

る。そこで、初版の出版年を提示し、その年順とした。

1. 江戸時代の裁縫書

- ・1764（宝暦14）年版『絹布裁要』
本書は裁縫書の原典となるものである。第九 尺積法⁴¹⁾
に「おはしより」に関連した記述は見られない。

2. 明治時代の裁縫書

- ・1878（明治11）年 久保田梁山著『女学生徒 裁縫教授書』上の例言では、「丈ヲ二丈七尺ト巾ヲ九寸五分ト定ムルハ男女ノ肥瘦ニ因テ丈ヶ巾ノ過不足アリト雖モ此二出ス所ノ丈巾ハ尋常ノ普通ニ用ユルトコロヲ出ヒシナリ」⁴²⁾
と体形によって丈・幅の過不足はあるが、基本は標準寸法で捉えている。「おはしより」関連の用語は見られない。
- ・1880（明治13）年 渡辺辰五郎編『普通裁縫教授書』では衣服寸尺の取方は省略され、
男服ハ丈三尺六七寸・・・女服ハ丈四尺」⁴³⁾
と通常男女着物丈が記された。
- ・1887（明治20）年 鈴木正夫編『和洋男女 裁縫獨案内』巻之七 和服の部では、女物仕立揚寸法を「丈三尺九寸五分」⁴⁴⁾と定められた。
- ・1906（明治39）年 堀越千代子著『和洋裁縫教本 和服篇』では裁方の図下に寸法の割出が示され、本裁女服鉤衿裁方をみると
$$\{(用布 - 袖丈 \times 4 - 衿下裁切) + 衿下\} \div 5 = 身丈$$
⁴⁵⁾
と身丈は用布から換算される鉤衿裁方手法が採られた。

3. 大正時代の裁縫書・裁縫教科書

- 寸法はこれまでの鯨尺からメートル尺に改定された。
- ・1918（大正7）年 共立女子職業学校桜友会裁縫研究部編『増訂 裁縫新教科書』第八 衣類仕立ての心得二、仕立上げ寸法につきての注意
身體の肥瘦・長短を考へて、普通仕立上げ寸法に斟酌を加ふること肝要なり。⁴⁶⁾
とあり「おはしより」分の記載はないが体形に合わせた寸法の取り方を教授している。因みに、本裁女單衣普通仕上げ寸法は身丈一米五〇糧（三尺九寸内外）⁴⁷⁾とあり、図解では単衣の場合が148cm⁴⁸⁾で、衿は152cm⁴⁹⁾の身丈で計算された。また、「本裁女小袖重ね」として二枚重ね、三枚重ねの別を述べ、身丈152cm⁵⁰⁾

であった。さらに、一枚の小袖で二枚重ねのように仕立てた「比翼」も紹介され、152cm⁵¹⁾の身丈が表示された。

- ・1923（大正12）年 成田順著『小学校に於ける 裁縫教材と其の指導法』では本裁女物の身丈を148センチ内外⁵²⁾と『増訂 裁縫新教科書』と同様であった。

4. 昭和時代の裁縫教科書・裁縫書

- ・1930（昭和5）年 石田ひろ著『裁縫教育の諸問題』第四章 裁ち方縫ひ方教授の重要問題 五 積り方 和服の積り方の際、身丈を出してから衿丈を出すといふ方法⁵³⁾
衿丈をさきに出して、身丈を後に出す方法⁵⁴⁾
両者いずれの積り方でもさし支えないとしている。寸法について、学校の和服裁縫では普通寸法を用いたが、着用者の体格・着方を考慮して採寸の必要性が説かれた。特に洋服裁縫が着用者の割寸法から身体に合った仕立てとしたことが和服にも反映された。一方、和服は着付が重要だと述べられている。⁵⁵⁾尚、ここでは割出方法には触れられていない。
「おはしより」の用語および着法の解説はこれ以降にみられた。その引用を列挙したい。
- ・1957（昭和32）年 大塚末子著『文化服装講座 和裁篇』「きものの名称と和裁用語」
お端折（おはしおり）
女物長着は、すべて着丈よりも20センチ前後長く仕上げて、たくしあげて着ます。たくしあげた部分をお端折といいます。⁵⁶⁾
- ・1958（昭和33）年 牛込ちゑ・大竹この・佐成郁子著『被服構成（和服篇）』3. でき上がり寸法 1) 身たけ おはしより分として25cm内外を加える。身丈と同寸にしてもよい。おはしより分は着装した場合帯の下縁から7cmくらい出るのが適当である。⁵⁷⁾
- ・1962（昭和37）年 共立女子大学編著『新版和服裁縫全書』「大裁ち女物ひとえ長着」3. 寸法の測り方と決め方 (3) 身たけの決め方 裁ち切り身たけは採寸した着たけに、縫いしろ・くりこしと端折り分など25cm内外を加える。⁵⁸⁾
- ・1963（昭和38）年 波多江穂野著『全訂最新和裁全書』長着「大裁ち女物ひとえ長着」形と名称
女物の長着ははしよりして着つけをするために身たけは着たけより長く⁵⁹⁾
- ・1969（昭和44）年 土井幸代著『和裁』

3. 和裁用語について ・「お端折り」

着たけでない長めの着物を着つけると、腰でひも、その他のものでからげること⁶⁰⁾

- ・1969 (昭和 44) 年 講談社編『和裁 = 基礎と仕立て方 = <改訂新版>』「着付け」を番号順に解説して
15 帯を高くしめるときや、おはしよりの多いときは上にしめる
16 帯を低くしめるときや、おはしよりの少ないときは下にしめる⁶¹⁾
- ・1970 (昭和 45) 年 岩松マス著『新しい寸法による図解式 和服裁縫 礼服編』「外出着の着つけ」
左手を身八つ口に入れて下前のおはしよりを、厚くならないように胴まわりの細い部分に折り返して⁶²⁾
- ・1970 (昭和 45) 年 成田順・石原アイ著『和裁の研究』3. 和裁についての新しい研究問題
背の低い人が、普通に仕立てた身たけでは、〈おはしより〉が多すぎて着にくいし、ふとった人が、身幅を普通にしては、前があわないで、おかしな格好になる⁶³⁾

(2) 計測部位の寸法と着物の寸法との関連

3) はしより

20センチ前後が適当であろう。⁶⁴⁾

女子大学の前身である職業学校を含めて、和裁教育において「おはしより」は用語として定着し、その長さは20～25cm位で下縁から7cm、身丈の調整を目的に用いられた。和服は着付けが大切で、そのためにも「おはしより」の着法は重要視されたことがわかった。

VI. おわりに

近世初期に男女共に対丈であった小袖が、江戸時代に男物と女物に分かれた。男物は今日まで対丈であるのに対して、女物の着丈は次第に長くなった。その結果、室内では裾を引いて支障はなかったが、外出の際には足さばきを良くするために腰のあたりで引き上げる必要が出てきた。江戸時代は、右手でたくし上げる方法や襷を取ったが、手が塞がる不都合が生じ、身近な細紐を締めて前身頃をはしよった「抱帯」や「しごき帯」が登場した。一方、幅の狭い帯においては帯の間に挟んだが、帯幅が広がるとそれも不可能となった。明治時代、「腰紐」に「下締」が用いられ「おはしより」の姿となった。現在、和服着装では裾を整え、腰紐を締めて「おはしより」を作り、着物ベルト（コーリンベルト）または腰紐ですっきりさせるわけで、その二つの紐が揃って

「おはしより」ができるのである。

「おはしより」は女物の着丈の調整用と共に、体形補正の一役を買った。女性の外出の機会が増え、活動性を求めた結果として「おはしより」が常用化し、利便性から固定化したのではと考察できた。

近藤富枝著『一葉のきもの』では「四季のきもの」で何しろ暖房の整っていない頃なので、冬はかさね着をするよりなかった。家のなかで裾を曳くということも、上流の古風な家、料理屋などの内儀は明治になってもやっていた。裾をあげるようになって、前代のしきたりの名残で、ブクブクしたおはしよりになった。⁶⁵⁾

と大きな「おはしより」の様子が述べられている。

さらに、同書の「きものを読む」では

傷みのはげしい前身ごろを後ろ身ごろと交換して着るので、おはしよりのなかにはぎ目が入るから、ちょっと見には細工がわからない。⁶⁶⁾

と着物を仕立て直しして大切に着ていた女性達にとって「おはしより」は隠された利点であったと捉えられる。

利便性に加えて着装美が求められた結果「おはしより」は定形化されたと捉えられる。

また、和服裁縫書の裁縫用語を辿った結果、「お端折」の用語は1957年に確認できたが、1900年刊の雑誌「流行」に「ハシヨリ」と称されたことが「おはしより」の初出と考察した。

最後に、男物・女物と二分化された根本的要因についての研究を今後の課題としたい。

注

- 1) 小学館国語辞典編集部編『精選版 日本国語大辞典』第3巻 小学館 2006 P.58
- 2) 小学館国語辞典編集部編『精選版 日本国語大辞典』第1巻 小学館 2006 P.841
- 3) 1767～68 (明和 45) 年に成る鈴木春信画「六玉川 調布の玉川」(東京国立博物館蔵)に描写
- 4) ジョルジュ・ビゴーの1890 (明治 23) 年の「正月元旦」・「国会議員之本」、1892 (明治 25) 年「大日本」に描かれた和服姿に確認できる。
- 5) 谷田閏次・小池三枝著『日本服飾史』(光生館 2010 P. 127) では、江戸初期までの小袖を「女性もいわゆるおはしよりがなく対丈である。」と説明し、その後、現代の着物の形に近くなった姿として「女物は裾をひく長さになり、外出の際に裾をひきあげ、抱え帯で丈を調整するようになった。これが後におはしより(端折)となる。」と記している。佐藤泰子著『日本服装史』、増田美子著『日本衣服史』には記述がみられない。
- 6) 遠藤武著『遠藤武著作集』第1巻 服飾編 1985 PP.

221-237

- 7) 『服飾文化学会誌』〈論文編〉Vol.12 No.1 服飾文化学会 2012 PP.103-116
- 8) 『日本衣服学会誌』58 (2) 日本衣服学会 2015 PP.19-30
- 9) 平安時代中期以降、菅や薄い檜の剥板などで作られたかぶり笠。
- 10) 平安時代から外出時に頭からかぶった衣服。当初は広袖の衣被(きぬかずき)であったものが小袖形式(被衣)となる。かずき。かつぎ。
- 11) 岩波文庫『日本書紀』(3) 岩波書店 1994 P.180
- 12) 黒板勝美・國史大系編修會編『新訂増補國史大系』第39巻 徳川實記 第2篇 吉川弘文館 1964 P.400
- 13) 黒板勝美・國史大系編修會編『新訂増補國史大系』第41巻 徳川實記 第4篇 吉川弘文館 1965 P.509
- 14) 浮世絵聚花編集部編『浮世絵聚花』第1巻～第18巻 小学館、巻数：所蔵館は次の通りである。
1・2・3・17(補1)・18(補2)：ボストン美術館、4・5・6：シカゴ美術館、7：メトロポリタン美術館・ニューヨーク公立図書館、8：フォック美術館・ネルソン美術館他、9：ミネアポリス美術館・ポーランド美術館他、10：ホノルル美術館他、11：大英美術館他、12：ギメ東洋美術館・パリ国立図書館他、13：ベルギー王立美術歴史博物館・アムステルダム国立美術館他、14：ベルリン東洋美術館・リートベルク美術館他、15：東京国立博物館、16：フリーア美術館
- 15) 洒落本大成編集委員会編『洒落本大成』第15巻 中央公論社 1982 P.245
- 16) 長谷川時雨著『随筆・きもの』実業之日本社 1939 P.135
- 17) 近藤富枝著『文士のきもの』河出書房新社 2009 P.12
- 18) 増田美子編『近代衣服書集成』第5巻 服装改善運動と流行 クレス出版 2015 P.31
- 19) 同書 PP.31-32
- 20) 開原榮編「流行」第7号 流行社 明治33年 P.2
- 21) 開原榮編「流行」第11号 流行社 明治33年 P.3
- 22) 同書 P.39
- 23) 同書 P.40
- 24) 開原榮編「流行」第13号 流行社 明治33年 P.9
- 25) 前掲17) 同書 P.38
- 26) 同書 P.47
- 27) 同書 P.50
- 28) 陶智子・綿貫豊昭監修『文献選集近代日本の礼儀作法 大正編』第1巻 日本図書センター 2008 P.53
- 29) 和田桂子編『コレクション・モダン都市文化』第2巻 ファッション ゆまに書房 2004 P.259
- 30) 同書 P.268
- 31) 同書 P.269
- 32) 同書 P.270
- 33) 岩見照代監修『「婦人雑誌」がつくる大正・昭和の女性像』第11巻 美容・服飾・流行2 ゆまに書房 2015 P.173
- 34) 同書 P.174
- 35) 同著 P.313
- 36) 同著 P.328
- 37) 同著 PP.357 - 358

- 38) 大庭みな子著『大庭みな子全集』第3巻 日本経済新聞出版社 2009 P.387
- 39) 同著 同頁
- 40) 同著 P.388
- 41) 田中ちた子・田中初夫編『家政学文献集成』江戸期2 渡辺書店 1966 PP.306-312
- 42) 増田美子編『近代衣服書集成』第9巻 明治の裁縫書1—和服— クレス出版 2015
- 43) 同書
- 44) 増田美子編『近代衣服書集成』第11巻 明治の裁縫書3—洋服その2— クレス出版 2015
- 45) 前掲44) 同書
- 46) 増田美子編『近代衣服書集成』第14巻 大正の裁縫書2 クレス出版 2015 P.20
- 47) 同書 P.37
- 48) 同書 P.39
- 49) 同書 P.91
- 50) 同書 P.97
- 51) 同書 P.109
- 52) 増田美子編『近代衣服書集成』第8巻 裁縫教育 クレス出版 2015 P.178
- 53) 同書 P.217
- 54) 同書 P.218
- 55) 同書 PP.231 - 234 の要約
- 56) 大塚末子著『文化服装講座 和裁篇』文化服装学院出版局 1957 P.25
- 57) 牛込ちゑ・大竹この・佐成郁子著『被服構成(和服篇)』近代文化研究所 昭和女子大学 1975 P.18
- 58) 共立女子大学編著『新版和服裁縫全書』大日本図書 1964 P.27
- 59) 波多江穂野著『全訂最新和裁全書』柴田書店 1975 P.24
- 60) 土井幸代著『和裁』東京 同文書院 1969 P.27
- 61) 講談社編・発行『和裁=基礎と仕立て方=<改訂新版>』1969 P.29
- 62) 岩松マス著『新しい寸法による図解式 和服裁縫 礼服編』雄鶏社 1970 P.10
- 63) 成田順・石原アイ著『和裁の研究』東京 同文書院 P.11
- 64) 同書 P.14
- 65) 近藤富枝・森まゆみ著『一葉のきもの』河出書房新社 2005 P.24
- 66) 同書 P.71

図版出典

1. 『続日本絵巻物大成』14 中央公論社 1982 P.49
2. 『近世風俗図譜』第12巻 職人 図9 小学館 1983 P.20
3. 『近世風俗図譜』第6巻 遊里 図12 小学館 1983 P.25
4. 左：『名品揃物浮世絵』1春信 図28 ぎょうせい 1991
右：『名品揃物浮世絵』2清長 図15 ぎょうせい 1991
5. 『名品揃物浮世絵』2清長 図21 ぎょうせい 1991
6. 『名品揃物浮世絵』6豊国・国貞 図74 ぎょうせい 1992
7. 『ビジュアル・ワイド 明治時代館』小学館 2005 P.312